
恋のトコに魔法アリ！

水城みゆか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋のトロコに魔法アリ！

【Nコード】

N6150Q

【作者名】

水城みゆか

【あらすじ】

平凡な暮らしをしていた少年カイトは一国の姫君を王から奪ってしまい、逃亡生活へ。
次々と送り込まれる刺客。姫と過ごす魔法学園生活。姫の暗殺計画の裏に潜む事情とは……。

波瀾万丈な物語が始まる――。

始まりの夜

ローデン＝アルド大陸。

夏と冬が消えた大地のここには、人々が魔法で生活を営んでいた。

「おい、そっちの帆船を早く入れろ」

天空からの使者を招く港、ヘヴネートには沢山の傳く男たちの声。男たちが扱うのは言葉のmanaだ。

だから先ほどからしきりに大声を張り上げている。

「もう少しこつちだ！」

そう言うだけで、男の元に船が近づいてくる。

港に船が接近すると、大男たちがロープをたぐって船を引き寄せ
る。

近づいた船は空から海へと着水する。

轟音と共に海水が緋色の飛沫をあげて沸き立った。

「よし、お前ら今日は終わりだ。次の停船は明後日だ、いいな」

大男たちは皆一様に大きなかけ声を上げて散り散りに去った。

海水を盛大に浴びた男は無精髭を払って、清々しく港を後にする。

大頭でもある男の家には一人の少年がいた。

日もすっかりと沈み、寂寥な星空が瞬く星空の下にその家はあつ
た。

小さな食卓を二人が囲っている。

「父さん、今日の帆船は凄かったよ。あれって*国交船だよね？」

「そうだが……お前また見に来てたのか」

「うん、俺将来は父さんと同じシーパーになりたいんだ」

「……」

無邪気な少年に大男は沈黙で返す。

「本当にそれでいいのか、カイト」

「ああ」

カイトは大きく返事をする、最後の魚の一口を頬張って席を立つた。

「ごちそうさま！」

勢いよく家を出て、食器を持ち井戸へ走っていった。

父である男は一人少年の後ろ姿を見つめていた。

——場所は変わってマリアワイト宮殿。

カイトたちがいる大陸とは山を二つ挟んだところに位置する王城だ。

その大理石の一室に少女へ傳く四人の侍女がいた。

「い、いたい……っ」

「我慢下さいませ姫様」

派手な衣装はおおよそ庶民が一生を投じても届かない豪華絢爛のものだった。

「け、結婚の儀礼は明日ではなかったの？ もう夜も遅いじゃない」

「先方の強い希望により、今夜となりました」

「なっなんでよ」

「先方の希望だからです」

「あ、あのバルセインって男、この間見たらいい歳こいたおっさんじゃない！ 私を妃に選ぶなんてロリコンなの？」

「ロリコンでも王は王です。あなたが彼に嫁げばこのアルド大陸の多くはあなたの父、エダン様がお納めになられるのですよ」

少女はろくに話したこともない隣の国の王に嫁ぐことになっていった。

そう、この時代には当たり前の戦略的縁談だった。

しかし、少女にとってみれば父と変わらない男の妻になるという行為が強い嫌悪を生む。

「そういう問題なの？ 私は絶対に嫌よ」

「ご辛抱下さい、今は辛くともそのうち自身の運命を受け入れることが出来ます」

「……」

もう何を言ってもだめだった。

運命だの辛抱だの、その類の言葉には少女は辟易していた。

それが当たり前なのだと教えられたって、国を背負う者の義務だと教えられたって、貧しくとも好きな男と共になる幸せを少女は想った。

「……？」

少女の後ろにいた女が何やら言伝を預かったようだった。

「バルセイン様からの言伝です。今夜を添い遂げれば、後は自由にしているそうです」

「？」

添い遂げる？ 一緒にいるということだろうか。
少女には意味がわからなかった。

「どういうこと？ ただそばにいただけでいいの？」

「そうですね、初夜ということでしょうか」

「じゃ？」

くすくすと笑いを押し殺す声が聞こえる。

それを侍女の主が咳払いで収めた。

「いいですか、姫。今夜を乗り切ればバルセイン様はあなたを自由の身にすると言っているのです。王がこれほどまでに情けをあなたにお与えくださった。それ以上の詰問は無礼と心得なさい」

とはいわれても少女にはまるで嬉しい話ではなかった。
少女にとってあの強欲で傲慢で慈悲のない人間が自分を丁寧に扱うとは到底考えられない話である。

「帆船の準備が出来ました。シーバーを呼びます」

—— 戻りへヴネート街外れ。

「なんだって？」

家の前に馬車で現れた一人の使者。

男は彼から手渡された速達伝書に記された王立勅命書に目を疑った。

そこには今夜出航、支急向かわれたしと書かれている。

「冗談じゃない、夜は休息の時だろうが」

カイトは家に帰ってくるなり、男の怒声に身を竦ませた。

「どうしたのさ、父さん」

「カイト、俺はこれからちよっくら出航の案内に行かないとならねえ。馬鹿な王国が何やらかすつもりらしい」

「今からじゃ大変だし、俺も行くよ!」

「だめだッ」

家の木張りが震える。

「こんな時間に勅命を出すくらいだ。何が起ってもおかしくねえ、最悪俺はもう帰ってこられないかもしれねえ」

男の言うことは正論だった。

この時代において、替えの人間などいくらでもいる。

それこそ、足りないものは奪い、用済みのものは捨てるのが各国の主義だからだ。

「俺が帰って来られなくなった時、今の港を任せられるのはお前だけだ」

男の言葉はカイトの胸に染みこんでいった。

今生の別れのような挨拶にカイトはただ頷くしかなく、その頭に固い男の手が優しく添えられた。

行ってくる。そう言っ男は夜道を馬車に乗って遠ざかっていく。

カイトはしばらくテーブルに着いて伏せていたが、不意に思い立ったように家を飛び出した。

「見に行くだけだ、見に行くだけ……」

何もなければ父より先に帰って何食わぬ顔でいようとそう決めた。

カイトは拭えない不安を胸に月明かりの下を走り出した。

しかし、カイトの予想は港についた時点で大きく外れていた。
盛大なセレモニーのような愉快的な曲調が響いていたのだ。

「なんだ、これ……」

大きな絨毯の先にはカイトと幾ばくも変わらぬ少女、そして無精髭の下に傲慢な笑みを浮かべる男が佇んでいた。

「ご祝婚いたします！」

ウワツと沸いた盛大な歓声に後押しされながら二人は帆船へと向かっていく。

夕暮れにみた国交船は凄まじい豪華絢爛な装飾で船にさえ見えな
い。

乗り込んだ二人はその巨躯の箱船によって見えなくなろうとして
いた。

「……い……っ」

何やら揉めている。

カイトはじつとその様子に目をこらす。

そこにいた不徳な笑みを浮かべる男は強引に少女を抱え込んで船
へと乗せた。

カイトはその一部始終を見なければ、あるいはただの夜間の結婚
式だと割り切って家に帰ったかもしれない。

しかし、あれは到底相手の意志を尊重したものには映らなかった。

『港を任せられるのはお前だけだ』

それとはもう一つ、男が良く口にしていた言葉をカイトは思い出
していた。

「この港を発つ者に迷いがある者を送ってはならない」

カイトは走り出した。

目指すは帆船の最後尾の装飾だった。

当然、あれよあれよという間にカイトの後ろには取り押さえようとする兵士達が群がる。

カイトは別に国に逆らっているつもりではない。

ただ、単に一般人が結婚の義をあげようとしているとは思っていなかった。

船が海辺を離れるすんでのところでカイトは装飾に掴まった。

途端に急上昇する帆船はもはや誰にも止められはしない。

高度数千メートルとなったところで、カイトは自分の愚行に気がついたのだった。

「そうだ、この船は勅命のあつた……」

仮にも王立勅命の帆船に搭乗しているのだから万が一見つかった場合は飛び降りるといわれても逆らえない。

国家反逆罪、王室侮辱罪などがカイトの頭を巡った。

「いやっ！」

その時、甲板の方から叫び声が聞こえてきたのだった。

「このッ……」

男は乱暴に少女の衣装を引き裂くと白い地肌がむき出しになる。

「触らないでっ」

「うるせえんだよ！」

少女の頬から乾いた音が響く。

初めて受けた暴力に少女は一層パニックになりながらも、心に強い不安と焦りが沸いて言葉に詰まった。

「……うっ」

「そうだ、最初からそうやっていればいいんだよ」

男は少女の体を床に組み伏せて太腿のあたりを持ち上げた。

「い、いや……」

喉がからからに渴き、少女の目には世界のすべてが恐怖に染まったように映る。

「良い声で泣いてくれよ」

まだ幼すぎる秘所に男の暴虐があてがわれる。

一気に貫くために男が腰に力を込めた瞬間だった。

ゴキという鈍い音が少女の眼前から聞こえた。

男はそのままゆっくりと少女の横に倒れ、代わりに現れたのは茶髪の少年だった。

手に持った重そうな装飾の一部は男を打った時に折れていた。

「大丈夫？」

カイトのそれは少女の目にどのように映ったのだろうか。

瞳に一杯の雫を溜ながら少女は起き上がって後ろを向いた。

不思議と喉の渇きは引いていき、代わりに羞恥心が徐々に沸いてくる。

腹違いとはいえ、王の一族である自分がこんな庶民に助けられたのだ。

プライドは保ちたかった。

「よ、余計なことをしてくれたわね」

しかしそれは声というより、震えたすきま風の音に近かった。

そう、余計なことなのだ。

「え？」

「見て分らないの？ あんたは私の夫を殴り殺したのよ」

思いの外、少女は正当な言葉が紡ぐことができ安堵する。

「きいさあまア……どんな魔法を使ったのだ……ッ」
驚くべきは男が再び立ち上がったことだった。

しかも、後ろの少年には気づきもせず、目の前の少女を睨み付ける。

「ひっ」

後頭部から血を流し、そのまま少女に掴みかかる男はもはやモンスターのようだ。

「いつ——やあッ！」

さっきよりも数倍強い力で少女は抵抗らしい抵抗もできず、股を開かされる。

少年カイトは先の言葉を鵜呑みにしてしまい、戸惑っていた。

少女は嫌がる素振りをみせて、本当は邪魔されたくないのではないのでしょうかとも考える。

しかし、少女の方はいえ、これは王族としてのプライドを捨ててまで庶民の少年に助けを求めるほどのことなのか、男のすることとは一体なんなのかと判断できかねていた。

目の前の男がこれから自分に何をするのかがわかっていないが故に助けてほしいと切り出せない。

その時、不意に少女は股の下に鋭い痛みを感じた。

「痛っ！」

はつきりとその目に映ったのは男が自分の逸物を自分の秘部にあってがっていることだった。

少女はさっきも同じようなものを見ていたはずなのに今のいままで忘れていたのだ。

「た、助けて！」
だがその声ははっきりいつて遅すぎた。

少女の秘部は男の亀頭を飲み込まんとする前に裂けようとしていた。

あまりに不釣り合いな二つの性器は愛撫なしに結合することが適わなかったのだ。

「イタイツ、イタイよ！ たすつ、助けてえッ！」

カイトもようやくそれが演技でないことに気がついて男に飛びかかった。

男もようやく先の一撃が第三者によるものだと気づき、慌てて少女から放れて抵抗する。

男とカイトの体格差ではもみ合いにすらなりそうもなかったが、勃起と初撃の目眩が残っている状態で男はふらつきながら船の縁へ片腕をかけて腰をついた。

「なんだ、貴様は！」
「うおおお！」

振りあげた十字架は男の太腕でたやすくいなされ、カイトは二の腕に鋭い痛みが走ったかと思う間もなく、信じられない怪力によって宙を舞う。

カイトは気づけば甲版の中央へと叩きつけられていた。
「ぐはっ」

男がカイトを殺そうと腰の祭剣を引き抜き宙にかざした時、後ろからまたも衝撃があった。

少女がカイトの持っていた折れた十字架の装飾で殴りつけたのだ。
「うっ……」

腰に鋭い痛みが走った男は先の頭への一撃も相まってその場で片膝をつく。

「げほっ、こっちだ！」

カイトはおもむろに立ち上がり、少女を逃がすために脱出用のポルトへ向かう。

緊急着陸用の小舟が安置されている後ろの甲板へ急ぐ。

「ウオオオオ！」

男としてのプライドを傷つけられたのに激怒したのか剣を捨てて今度は杖を出した。

「貴様らまとめて死ねエ……！」

【——ヴォルド・グ・スパイア（炎槍）】

光と共に空間が歪み、撃ち出されたのは鋭い朱針だった。

魔法という現象を言葉でしかなかったカインは突然のことに何が起ったのかわからない。

ごとと光が瞬いたのは突如目の前に出てきた大男が全身でそれを受け止めたからだだった。

「騒がしいと思えば、お前だったのか」

「父さん！」

「早く行け……ふりむくんじゃないぞ」

そう言う父の背中からは男のシルエットが丸く映し出されていた。

「きゃああー！」

少女の叫びもなおざりに急いで船へ飛び乗る。

エンジンをつルスロットルにして、カイトを乗せた船は一気に飛び出した。

船から切り離された小舟は悠々と暗がりの中を下降していく。

「くそっ、父さん……」

月明かりで映し出される林の中、隣では少女が黙ってカイトを見ていた。

舟は暗い森の中に着地する。

お互い無事ではあったものの、声など出るはずもなかった。

命を狙われた恐怖が後になってやってきたのだ。

「……うつ、ごめんなさい」

少女はあの痛みを思い出して、暗い森の中、不意に恐怖に押しつぶされそうになった。

誰にも見せたことのない涙を見ず知らずの少年の前で止めどなく流す。

緊張の糸が切れたのもあるし、これからのことを思うとただでは済まされないだろうという予感もあった。

何より、自分が助けてくれと懇願したこの少年は恐らく斬首よりも惨い死をもって処されるだろうという確信が少女にはある。

「いいよ……俺のせいだから」

カイトは自分の父が死んだことを謝られているのだと考えていた。本当の父ではなかったが、実の父以上に愛情を注いでくれた義父を自分の身勝手さで殺してしまった。

こんな一時の感情で愛する人を殺めてしまったカイトは自分で分で許せなくなりつつあった。

本当にごめんなさいと隣にいる少女が泣いて詫びるが、助けた少女に泣かれてはカイトはますます自分が正しかったのか理解できなくなる。

カイトはもう考えるのをやめて、ただ船の消えた方向を見つめる。

「ねえ」

そんな折りに少女がカイトへ口を開く。

少女は幾ばくかの責任を感じていた。自分のために身を投げて助けに来てくれた少年の父は自分が殺したと同じようなものだと思うたからだ。

「なに」

「いつまでそうやっているつもりなの」

震える声もだいぶ収まってきて、だんだんと少女は冷静になっていた。

「いつまでって助けが来てくれるまでさ」

「助け？ そんなもの来ないわ」

「来ないって？ どうして、君はお金持ちなんだろう。だったら来るよ」

「来ないの。私はもう捨てられたも同然だから」

驚いて少女の方を見やるカイトだったが、その顔はもう気丈に満ちていた。

「捨てられた？ 助けたのに？」

カイトにはさっぱりだった。

「助けたっていわないわよ、あれは横取りしたようなものね。しかもバルセイン王から」

少女はそういつてから高々に笑い出した。

これが笑わずにどうしろというのだろう。

「王？ あれが？」

「考えてみたら凄いことだわ！ アルド大陸の三分の一を治める王国から女を横取りしたのよ」

「別に取ってはいないけど……」

「取ったのよ！」

カイトは腑に落ちないまま押し黙った。

少女はそんなカイトに背を向けると、明るみ始めた空に向かって言った。

「それじゃ、さつさと案内して頂戴」

「え？ どこに？」

「ばかね、そのまま待ってたら私もあんたも殺されるわ。それに私は今裸足なの？ あんたが私の足になるの」

「当然じゃない」と手で催促され、カイトはしぶしぶ背中を差し出して少女一人分が重くなった。

「ほら、きびきび歩いて」

優しい言葉で首にまわされた腕は穏やかなものだった。

足場の悪い地面を歩かされ、正直不快だったカイトだが、父は最後にふりむくとも言っていた。

ならば、背を向けて歩くしかないとかイトは心に決めた。

「そ、その——ありがと……助かったわ」

不意に背中から聞こえた声はカイトにしつかりと聞こえた。

今はそう、背にいる少女を助けるのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6150q/>

恋のトコに魔法アリ！

2011年2月23日19時33分発行